

『秘密の鍵開けます』

著:いおかいつき

ill:あじみね朔生

夕方になると、新はテレビの前に陣取り、画面から目を離さなかった。どの局も一斉にニュース番組を放送する時間だから、チャンネルは適当に選んだ。

昼間に新が関わった事件がどうなったのか、放送で知ることはできないかと考えた。

何かの事件の容疑者が、警察に捕まる前に自殺を図ったらしい。新が知っているのはそれだけだ。もっと詳しく知りたいというのは、ただの野次馬根性で、誰に頼まれたわけでもない。

新はときどきチャンネルを変えながら、聞き覚えのある街の名前が出てこないか、キャスターの声や映像に集中する。

『続いても事件です』

「これだ」

キャスターが告げた続くニュースに、新の視線は釘付けになる。

一週間前、パチンコ景品交換所を襲い、店員に怪我を負わせるという強盗事件が発生した。目撃証言から犯人は二人組とされたが、その容疑者の一人が大量の睡眠薬を飲んで自殺未遂、容疑者は一命は取り止めたものの意識不明の重体だという。その容疑者が赤井雅治だった。ニュースの扱いは小さく、それ以上の情報は得られなかった。

「二人組ってことは共犯がいるんだよな」

もう別の事件を伝えているテレビ画面を見ながら、新は呟いた。これが小説やサスペンスドラマなら、金を独り占めするために、共犯者が赤井を自殺に見せかけて殺したという筋書きになるところだ。だが、これは現実。そううまくことが運ぶとは思えない。新がそんな空想をしているときだった。

「日向」

ふいに店先から九条の声が聞こえてきた。今日、訪ねてくるという連絡はなかったが、九条ならいつ来ても大歓迎だと伝えてあるから、こうして時々だが、仕事帰りにふらりと立ち寄るようになった。それでも九条は会いたいからと言わず、毎回、何かしらの用事を口実として考えてくるのだ。

今日はどんな口実を作ったのだろうかと思ひながら、新は九条を招き入れるため、居間から店に顔を覗かせた。

新は自宅一階の一部を店舗として使っている。一階には他に居間と台所、それに風呂トイレがあり、二階は和室が二間だ。新は寝るとき以外は一階で過ごしていて、今いるのもこの家で唯一、テレビのある居間だった。

日向鍵店の閉店時間は定まっていない代わりに、営業しているはずの時間でも店先ではなく奥にいることも多かった。それでも問題ないのは、客のほとんどが電話での出張依頼なのと、店に直接やってくる場合でも、客の多くは自宅を併設していることを知っていて、店先にいなければ奥に向かって声をかけてくれるからだ。

「おう、こっちだ」

新はカウンターの前に立つ九条に、軽い口調で呼びかけた。けれど、九条はそれに反して硬い表情だ。

「こんな早い時間にどうしたよ」

新は顔色には気づかない振りで問いかけた。これまで九条が訪ねてきた中では、一番、早い時間だ。

九条は自分の仕事についてほとんど話さない。だから、何時から何時まで働いているのか知らないのだが、世間的には刑事といえば朝も夜もないような職業のはずだ。

「お前、戸高さんに何を言った？」

新のところへと歩み寄りながら、九条は陰しい顔でいきなり切り出してきた。

「戸高？ ああ、あの刑事のおっさんな」

馴染み深い名前ではなくても、昼に会ったばかりだからすぐに思い出せる。新は答えながらも、手で指し示して九条を居間に上げた。

仕事帰りでスーツ姿の九条は、安っぽい折りたたみテーブルを挟んで、新の向かいに座る。以前なら、直接、畳に座ることを気にしていたが、今はもう躊躇う素振りは見せない。

「署に電話があった。面白い友達に礼を言ってくれとな」

九条は苦々しげに事情を説明するが、新には嬉しい知らせだった。やはり戸高は他の刑事たちよりも話がわかると、自分の目が正しかったことが嬉しくなった。

「所轄が違うから無理とか言ったのに、ちゃんと連絡してくれるなんて、結構、いいところあるじゃん」

「日向」

依然として九条は硬い表情を緩めず、また厳しい声で窘めるように名を呼んだ。

「警察に協力したってのに、なんでそんなおっかない顔をされるかな」

「お前がしたのはそれだけじゃないだろう。いろいろ大変そうだが頑張ってくれとまで言われたんだ」

「励まされただけじゃあな」

新は露骨にがっかりして見せる。言葉だけなら誰にでもできるし、しかも、遠くからの励ましなら同じだ。

「だから、お前は何を言ったんだ？」

早く詳細を教えろと、九条がなおも詰め寄る。

「たいしたことじゃねえよ。お前の味方になってやってくれって言っただけだ」

「余計なことを……」

「俺がお前の心配をすんのは余計なことか？」

新は舌打ちする九条を遮り、表情を変えて真剣な目で見つめる。その視線を受け止めた九条は、急に頼りなげな顔になり、それを自覚したのか隠すように顔を伏せた。

十年ぶりに再会して本当の九条を知ってから、支えになれる方法を探していた。意地と虚勢を張って覆い隠した九条の脆さを、新はなんとか支えてやりたかった。そんなふうに誰かを想ったのは初めてだ。

「心配してくれなんて言ってない」

新の顔を見ないようにして告げる九条の言葉に強さはない。付き合いだしてからというもの、こんなふうに新の前で脆さを見せることが多くなってきた。

新は九条と関係を持つまで、女性との経験しかなく、だから、まさか自分が男の弱さ

にそそられる日が来るとは思ってもみなかった。

「ホントは嬉しいんだろ？ 俺に心配されんの」

否定の言葉を口にできないように、新はテーブルに身を乗り出し、九条の伏せた視線の先に顔を近づけ下から覗き込む。その行為が予想外だったのか、ごく至近距離にある新に気づき、九条は言葉と一緒に息まで呑み込んだ。

未だにこんな初な反応を見せる九条に、新はますます悪戯心が湧き起こってくる。自分にサドの気があるとはこれまで感じたことはないが、九条を相手にするときだけは、守ってやりたいのと同じくらいに泣かせてみたくもなる。

「泊まってく？」

新が誘いをかけると、九条は一瞬にして顔を真っ赤にした。もう数えきれないくらいに抱き合っているというのに、羞恥を感じるのが九条らしい。

「……明日も仕事だ」

九条としては、おそらく強気に言い放ちたかったのだろう。けれど、その声はか細く、とても力強さは感じられなかった。

「難しい選択だわ」

新はわざと神秘的な顔をしてみせ、腕を組んで悩む振りをした。

「何がだ？」

案の定、九条が顔を上げ、どうしたのかと尋ねてくる。そんな九条に新はニヤリと笑いかけた。

「ただ泊まってくだだけでもいいじゃんと言いたいとこだけど、九条が横に寝てて手を出さないでいる自信がまったくねえんだよな」

「偉そうに言うことじゃないだろう」

呆れたように言いながらも、その意味に気づいた九条の声に厳しさはない。むしろ震えているようにさえ聞こえる。怯えからではなく、おそらく期待のせいだ。

後もう一押しすれば、九条は朝までここにいる。新は確信を持って言葉を続けた。

「けど、大丈夫かな。お前も結構、体力がついてきたし、充分、慣れてきただろ」

「なんの話だ？」

九条がきょとんとした顔で問いかけてくる。新はかなり露骨に言ったつもりだったが、色恋沙汰には鈍い九条らしく、通じていないようだ。その『らしさ』がますます新を煽る。

「一回だけなら、明日の仕事に差し障るほど疲れないんじゃないかってこと」

新は勝手に結論を出すと、テーブルを脇に押しよせ、九条との距離を一気に詰めた。

「ちょ、ちょっと待て」

後ずさりとする九条を、新はスーツを掴んで引き止める。

「何を待って？」

「いや、その……、ここですか？」

九条は明らかに狼狽えた様子で、部屋の中を見回した。

「なんか、問題ある？」

「あるだろう。誰か入ってきたらどうするんだ」

答えた九条の目が、店舗部分に繋がる障に注がれる。

九条が気にしているのは、店の引き戸に鍵がかかっていないことだろう。自分が入ってきたから、鍵をかけなかったのは明らかだ。それにわざわざ話してはいないが、勝手口のドアにも鍵をかけていないことは、九条もわかっているだろう。

唯一の肉親とも言える祖父を亡くして以来、一人暮らしをしている新は、近所の商店街の住民から息子のように思われていた。子供の頃から何かと世話を焼いてもらっていたから、三十近くになってもまだ子供扱いだ。食事も自宅で食べるときは、何かしら近所から差し入れがあり、それを届けてくれる誰もが、一言、声をかけただけで勝手に戸を開けて入ってくる。今もまだ午後七時にもならない時間だから、誰か入ってきてもおかしくない。

「じゃ、二階に場所を移してもいいけど、その代わり、泊まってけよ？ ちゃんと朝早い時間にお前んちまで送ってやるから」

新はそうやって九条の逃げ道を塞ぐ。

本文 p34～42 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>